

かがみやまごきょうのにしきえ ながつぼね
加賀見山旧錦絵 長局の段

てこそ入りにける

跡見送りて襖の陰、お初がそれと抜き足さし足、辺りを眺め吐息つき

お初「テモ怖しい工たくみ事。お下がりの遅いゆゑ、どうかかうかと思ひ過ご

し、陪者またものの行くことならぬ奥御殿。行てみやうとは思つたれど、咎とがめられよ

か叱られうかと、取つて返した襖の陰。悪局の岩藤殿とアノ伯父御の弾正殿、

モ大それた悪事の相談。コリヤ大切なことぢやわいの、尾上様に申上げ、お上

へのご忠節。アイヤくく証拠も持たず大切なことを生半なまなかに、これを訴へ

てお主様を咎に落とし、どのやうなご難儀をかける企みのほども知れぬ。わし

が大事のお主といふは、尾上様よりほかにはない、オ、さうぢやく」

とひと筋に恩義に迫る主思ひ

待つ間もとけし長廊下、しづく御殿を下がる尾上

それと見るより

お初「オ、ご機嫌よう今お下がり。いつくよりも遅いお下がり、どうやらお顔持ちもすぐれず、お心悪うはござりませぬか」

尾上「アノ初としたことが、気疎い物云ひ。毎日々々の御前勤め。下がりの早
いこともあり、ご用が多けりや遅いことも、あるはこの上まゝあること。勝手
知らぬそなたゆゑ、案じるは無理ならず。サア供しや」

と何気なき詞ににそれと気も付かず、上辺を包む上草履、直す草履も昨日の遺
恨、思ひ悩みてひと筋に、歩む廊下も心には、羊の歩み隙ひまの駒

神ならぬ身のそれども、知らぬお初が物案じ、いく間も遠き長局、部屋の戸
開けて内入りも

常に変はりし顔色を、悟られまじと、癩しやくに紛らし

尾上「正直はさつきにから持病の瘡つかへが起こつたわいの。夕飯ゆうまも食べたうな
い、いつもの通りさすつてたも」

お初「はい」

とお初がさし寄つて

お初「先づお枕をあそばしませ、お風邪召すな」

と搔卷かしまきを、甲斐々々しくも立廻り

お初「お癩の起ころもお道理様ぢや。それにつけても軽い者は、奉公とても氣散じに、旦那様やご家来やら、お友達見るように、お心安うなさつて下さりや、病ひ氣もござりませぬ」

尾上「オ、言やる通り、上々方の宮仕へは、いかう心氣しんきを遣ふもの。そなたの父御ていごも武士と聞いたが、世が世ならどのやうなご奉公もしやるはずを、町人の娘のわしが使ふといふは、さぞやさぞ、心憂くも思やらうが、とかくに人は時節を待ち、花咲く春を待つのが肝心」

お初「オ、勿体ないこと御意あそばすな。何事も大旦那のお話にご存じならん。私親子が受けし御恩は、口にも筆にも尽くされませぬ。せめてものご恩報じ、無調法な私が、お傍でどうぞご奉公とお願ひ申し、この春から初奉公ういの御面倒、モありがたう存じます。その大切なお前様が、ご病身なをお案じ申し、どうぞお患ひの出ぬやうにと存じますが、年端もゆかぬ私が口から、ませたことを言ふ小癩者、とお叱りもホ、あらうけれど、とかくに人は氣を晴らし、ものに屈託さへいたさねば、患ひは出ぬものぢやと、巧者なお医者いしやの申されましたが、そのご養生には物見遊山。アノお前様も芝居はお好きでござりませうな」

尾上「オ、なるほど芝居は好きぢやが、そなたも定めて好きぢやあらうの」

お初「イヤモウくく、好きの段ではござりませぬ、ガさう申すうち、歌舞伎より操り芝居の浄瑠璃が、私は面白うござります」尾上「オ、それなれば話が合ふ。わしもきつい浄瑠璃が好き。しかし、たまぐの宿下がりよりほかは浄瑠璃本で楽しむばかり」

お初「ハイ、私もお屋敷へ上がりませぬその前は、よう見物に参りました。ガ当たり浄瑠璃も多い中に、あの『忠臣蔵』の浄瑠璃ほど、面白いのはござりませぬぞえ」

尾上「オ、あの師直せろのおづらの憎さく」

お初「イヤ申し、お前様のお心には、塩治えんや殿の師直へ斬りかけられしそのところは、マ尤なことに思し召すか、但しまた不了簡なことに思し召すか。サマアなんと思し召しますえ」

尾上「さればの、ご短慮にはあつたれど、遺恨に遺恨を重ねる上は、ホ、ご尤にもあるかいの」

お初「イエくく、憚りながら、そりやお前様のご鼻ひしき口、塩治殿は大不了簡。サなぜと御意あそばせ。大切な身を軽々しう、短気にその身を滅し給ひ親御様のお嘆き。ハ、ハ、ハ、ほんに私としたことが粗相な、塩治殿に親御はなにもせぬもの。ホ、ハ、ハ、サなんと思し召す。家国を滅ぼし奥様はじめ、ご家中散りぐ。たつた一人の不了簡が、千万人の身にかゝつてご恩を受けた者

どもの歎きのほどは如何ばかりと思し召すぞいのお情ない。阿保らしい、なんのこつちや。拍子に乗つてお前様へご異見のやうに、オホ、、、オ、をかし、どりやお薬を見て来う」

と何か詞に綾の糸、勝手へこそは立つて行く

跡に尾上は胸迫り、忍び涙の淵も瀬も、明日はなき名を白紙しろかみに、硯の海のそ

こはかと、なき長文ながぶみも後や先、書き置く筆の命毛も露と消えゆく儂さを、絶

え入るばかり忍び泣き。涙と共に書き留め、革の文箱も、浦島が開けて悔やし

き遺恨の草履。文諸共に文箱の、紐引き締めて傍かたへなる、手箱の内を形見わ

け、数も涙の玉櫛たまぐしげ、こまぐしくも小文庫に、思ひ詰めたる憂き涙。包む

に余る小風呂敷、中結び締めて玉の緒も、今を限りの空結ひに封もしどろにかきくれて、胸に満ちくる血の涙、袖に包みし思ひなり

何心なく勝手口、お初は心息せきと、煎せんじ上げたる薬鍋、片手に茶碗携へ出で

お初「サアお薬」

と差し出だし、見れば包と文箱に、キツと目をつけ

お初「これはしたり、お心悪いにどこへのお文、お気が尽きやうに何事」

と問ひかけられて、さあらぬ態

尾上「イヤ、この文は母様へ急に上げねばならぬ文、この包み大儀ながら、つい行て来てたも」

とものがるに

言ひつけられてもぢくと、どうやら済まぬ今日のしだら、不精々々に

お初「アノ参れなら参りませうが、アレ／＼御覧じませ空合ひも曇つてくる。勝手がましう思し召しませうが、明日のことになされませぬか」

尾上「テモ初としたことが、如何に心安だてとて、主の言ひつける宿への使ひ、明日のことにでもせいとは、如何に女の主なればとて、主の言ひつけを背きやるか」

お初「イエ／＼／＼なんの御意を背きませうぞ。ご持病のお癩も起こり、お顔持ちも悪いゆゑ」

尾上「イ、ヤ癩気はもう癒なほつた、日のたけぬうち早う行きや」

お初「ハイ」

尾上「サ早う行きや」

お初「ハイ」

尾上「何をうじ／＼するぞいの。行けと言はゞ、行かぬか」

お初「ハイたゞいま参りますわいの」

と文箱取り上げ次の間の、案じに胸も張り葛籠つづら、明けて出したる生木綿きもめんの在所染めなる紋付きの、部屋方者の一張羅、帯し直して独り言

お初「今日に限つてこのお使い、行きともなうて／＼、尾上様のお身の上が案じられて、どうもならぬ。昨日鶴ヶ岡の喧嘩の様子、御殿いっばいの取り沙汰をご存じないか、わしにまでお隠しなさるゝお心のほどが、わしはどうも案じらるゝ。真実底から大切に思ふお主の大事を、こりやアノ虫が知らすとやら言ふのか、ア、心許ない／＼。ご機嫌に違うても、行たふりしてゆくまいか、ア

イヤ／＼／＼どういふ急な御用やら知れぬことを、さうもなるまい、オ、かう
いう時の仏神様、さうぢや／＼」

と塵手水ちりちようず、一心無我の手を合はせ

お初「南無観音様観音様、南無鬼子母神様鬼子母神様、お宿へ参つて帰ります
うち、主人の身の上頼み上げます。どりや、ひと走り走つてかう」

と小褌こぶまり／＼しく高絡たかからげ、錠口鎖して出でて行く

影見ゆるまで見送りて、堪へ／＼し胸の内、思はずワツと伏し沈み、消え入る
ばかり歎きしが

やう／＼に顔を上げ

尾上「まだ昨日今日、馴染みもないこのわしを大切に、大恩受けた主人ぢや
と、年端もゆかぬ心から、大事に思うてくれる志、コリヤ恭いぞよ、嬉しいぞ
よ。岩藤へ遺恨を察し、さつきにも余所事に浄瑠璃の譬へを引き、わしが短気
な気も出よかと、言ひ廻したる健気な利発。今別れたが一生の別れとは知らず
して、さぞやとつかは戻つて来て、歎かん事の不憫や」

と身も浮くばかりせき上げて、前後不覚に歎きしが
や／＼あつて顔を上げ

尾上「父様や母様の、この年月のご不憫がり。御恩は海もなほ浅く、山より高
き御恵み、片時忘れぬお二人様。この中のお文にも、母様のこま／＼と『いか
うこの頃は、おしなへて、ひき風邪の流行病はやり、一入案ひとしおじらるゝほどに、この
守りは萩寺の厄病除けのお守り。傍輩ほうばい衆も多いこと、悪い病の折見舞ひ、うつ

らぬほどに大事にかきや。またその上に、身用心というてほかにはない。食べ物に気をつけて、きうつ氣鬱せぬやうに折節は、酒でも食べて気を晴らし、患はぬやう、第一は、ご奉公を大切に、また合ひ薬のこくがんし黒丸子切れた時分』と気をつけて、『もう三年で御年季ねんも明く、お札奉公早ふして、下がりやるを指折つて待つてゐる』と、小さい子どもかなんぞのやうに、成人のこのわしを大事がつてござるその中へ、あの文をご覧じたら、なんと身も世もあられうぞ。常に気細な母様のその場で直ぐに死なしやんせう。今死ぬこの身より、跡の嘆きを見るやうで、胸も張り裂く悲しさは、なんの因果の報ひにて、親子の縁うずみの淡墨に、書き置く筆の逆様事。必ずお許しあそばせ」

と正体涙せぐりあげ、身も浮くばかり取り乱す

尾上「アゝ我ながら未練なり。女ながらも武家奉公、草履を以ておもて面を打た

れ、何面目に存へて人に顔が合はされやう。とは思へども、大切な御前様への

忠義を思ひ、今までは永らへしが、この書置かきおきに委細の訳。伯父弾正が悪事の

密書、命を捨てゝ上への忠節。たゞ何事も宿世の約束、最期の晴れの仕度して

一遍の経陀羅尼唱きょうだろにへんもの」

とひと間なる、仏間へさして日も西へ

夕日まばゆき、空色も磨き立てたる練り堀づくり、足利家の裏門口文箱抱へ出るお初。なり形振り見ずに息せきと行く向かふより

二人連れ。何かぶつくさ話し合ひ、来るもお初が心の辻占つじうらひ、行き違ひさま

二人連れ「ア、叶はぬ〜モウ叶はぬ、とって返すがまだしものこと」「ア、可哀いことをしました」

と聞く辻占にお初が『ハッ』と、見やる空にはひと群れの、止まり鳥の鳴きつれて、最期を告ぐる魂^{たま}呼びひ、心細さも身にしみて、歩みもやらず立ち止まり

お初「ア、気にかゝる〜、辻占の今の話、鳥鳴きのこの悪さ、アレ〜怪^けしからぬ胸騒ぎは、コリヤお宿へは行かれぬわいの。様子は知れるこの文箱、封じを切つて見てのけう」

と思ひ切つて封押し切り、見れば包みし草履片々、文取り上げて押し開き

お初「何じや『書置の事』、コリヤ叶はぬ」

と懐へ、一字も読まず一散に御門の内へと

入相^{いりあひ}の、鐘も無常を告げてゆく

転んづ起きつ廊下口。半狂乱のお初が仰天、部屋の襖も案内なく、ひと間を見れ

ば

お初「こは如何に」

血に染つたる尾上が亡骸^{なきがら}、抱^{いだ}き上げてたゞうろ〜

お初「エ、為成^{しな}したり、遅かつた〜〜わいなう。今ひと足早くばな、この

ご最期はさせませぬ、コレ申し尾上様〜、旦那様」

と呼べど答へも涙より、ほかに詞も泣き沈む

お初「笛のくさを思ひのま〜、搔き切つて〜ぎるものを、なんと答へがあるも

のぞ。ナニ『御前様ご披露』。ム、こりやさつきに窺ひ聞いた岩藤が密書。これさへあればお身の明かりは立つ、ありがたい、コレ申し、ご無念の魂はまだ、まだ家の棟やにおいでなされう、エ、聞こえませぬ、わいなう、昨日鶴ヶ岡で岩藤づらに、草履を以てお打たれなされたその取り沙汰は屋敷いつばい、ご家来の私が身で、口惜しうあるまいか無念ではあるまいかなう。女にこそ生れたれ、私も武士の娘、御鬱憤を晴らしかねうか。夕べひと夜さ、まんじりともせず、今日とても思案とりぐ、もう打ち明けてお話しなさるか、今打ち明けてお話しかと、見合はしてみてもお隠しなさる。エ、不甲斐ないお生れぢや、と傍で見る目の齒がゆくて。さつきにも浄瑠璃の譬へをひき、お心をひいてみれば、塩冶判官の短慮なも無理とは思はぬ尤ぢやと仰つた時のその嬉しさ。そのお心に張りがあれば、あつぱれお手は下ろさせぬと悦びは悦びしが、ひよつとお前様が浄瑠璃の塩冶判官をなされてはと、わざとお前をお宥なだめ申し、隙すきを見合はせ岩藤をひと刀に刺し通し、御恩を報じ奉らんと思ふに甲斐も、今宵の有様。お書置のこの面、追つ付け敵岩藤が、首引つ提げてご無念を晴らせませう。コレ必ずお待ち遊ばせ」

と遺恨の草履手に取り上げて、打ち眺め、無念の涙血を注ぎ、凝り固まりし烈女の一念、義女のその名を末の世に、錦と替はる麻の衣。女鏡と、知られけり夜もはや初夜を告げてゆく、ご夜詰め触れの音冴さえて、鉄行灯かなの光りさへ、いと淋なしき長局。

胸撫なで下ろし手を組んで、思ひ詰めたるその眼色。気も張り弓の三日月も、入

るさの影の暗紛れ。手水鉢に差し寄って、柄杓持ひしゃくつ手もわなくと、掬すくひ上げ
たる水ひと口。恨みの草履、片手には、血汐したゝる滴る尾上が懐劍。片手片足の早
寝刃。ねたば庭の千草に鳴きつるゝ、蛙の声も物凄し

辺り見廻し奥の間へ、真一文字に掛けり行く。忠臣義女の道広く、館をさして出
でて行く